

タイトル：2017 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.11)

日時：2017年11月29日(水)10:00～13:20

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, 2nd Floor, A2-1, Azariyeh Bldg, Beirut Central District

“Shi‘i Ulama’s Writing Strategy on Imams’ Faḍā’il in 12-14th Century Iraq”

水上 遼(東京大学大学院人文社会系研究科 博士課程／日本学術振興会特別研究員)

本報告では、12世紀末から14世紀前半にかけて、イマームの美德の書の分野において、イラクのシーア派(十二イマーム派)ウラマーがスンナ派を意識した戦略的な執筆活動を展開していたことを論じた。イマームに関する伝承やクルアーン解釈からなるイマームの美德の書は、シーア派の間でイマーム伝の一形態として発展していたが、12世紀末から14世紀前半にかけて、イラク、特にヒッラを中心とするシーア派ウラマーの間で特に多くの美德の書が編纂された。これらの著者の先駆けとなったイブン・アル=ビトリーク・アル=ヒッリー(1204/5年没)は、自身の美德の書を、スンナ派学者らを意識しつつ、イマーム崇敬が超宗派的の信仰として広まっていたことを示す形で著した。彼の執筆方法はその後のイラクのシーア派著者らに受け継がれ、更に発展していった。そして、彼らの編纂した美德の書は「ヒッラ・スタイル」と呼ぶべき共通の特徴を有するようになった。14世紀初頭にシーア派化したイルハン朝宮廷に招かれたアッラーマ・ヒッリー(1325年没)もまた、このヒッラ・スタイルを色濃く反映させた美德の書を編纂し、当時のスルタンであったオルジェイト(位:1304-16)に献上したのであった。こうしたヒッラ・スタイル発展の背景には、同時期に平行して展開していたスンナ派側でのイマーム崇敬の高まりがあったと考えられる。そして、イマーム崇敬に関心を持つ一部のスンナ派ウラマーは、実際にヒッラ・スタイルで書かれた美德の書を学び、それを受容していた。イマームの美德の書をめぐるこうしたスンナ派・シーア派間の関わり合いは、13-14世紀西アジアの「宗派的曖昧性」と呼ばれる宗教・社会状況を促進させたと考えられる。

コメンテーターの Maher Jarrar 氏からは、主に2つの大きな指摘を得た。1点目は、アリーや御家の人々に関してスンナ派ウラマーが編纂した美德の書は、12世紀以前にも数多く存在しており、それらと本発表で言及したスンナ派学者の間でのイマーム崇敬のあり方について更なる比較が必要である、という点であった。2点目は、シーア派的主題の内容をスンナ派文献に依拠しながら論じるという、12世紀以前のシーア派の間でも度々行われた方法と、本報告で提示したヒッラ・スタイルとの関係を考慮すべきであるという点であった。いずれの指摘も、12-14世紀に西アジアで起こった宗教・社会変化をイスラーム史全体の流れの中に位置づけることを求めるものであった。報告者の研究の視座や枠組みを更に広げうるこうしたコメントは、たいへんにありがたいものであった。

また、ベイルート滞在中に、フランス研究所やブック・フェアにも行くことができ、日本では得難い知見や書籍に触れることができた。報告会をはじめ、こうした様々な機会を与えてくださった黒木英充先生や JaCMES の錦田愛子先生、近藤洋平さんに感謝申し上げたい。